

2019年 夏・モンゴル 豊嶺会 50周年記念海外登山

A 嶺(k)

① 私にとってのモンゴル

初めて、「モンゴル」という国が印象に残ったのは、子供の頃に読んだ絵本『スーホの白い馬』というモンゴルの民話です。羊飼いの少年スーホと、彼と生活を共にする白馬の心の交流を表した叙情的な物語で、子供ながらに「馬が欲しい」と思ったり、当時近所で農耕用に飼われていた馬にやたらと親しみを覚えたりしたものです。

次に、学生時代に読んだ高木彬光原作のミステリー小説『成吉思汗(ジンギスカン)の秘密』です。源義経が、捕まることなく大陸に脱出してチンギスハーンになって、モンゴル帝国を疾駆、統治するという荒唐無稽な話です。しかし、本当にそんなんじゃないか？と思わせる事実や、日本とモンゴルのつながりがいくつもちりばめられています。そして、モンゴルや義経ゆかりの京都・鞍馬、奥州・藤原の地を何度も訪れた原作者の、取材力と想像力に驚嘆したものでした。このころから、「いつか、モンゴルに行っちみてえ！」と思うようになったんです。

② 出発まで

「海外登山は、出発までが8割」と言われますが、特に渡航先や目的の山の情報が少ない山域については、準備が全てと言えます。今回のモンゴルの山については、正にその通りだと実感しました。

当初、モンゴル国・中西部のハンガイ山脈・オトゴンテンゲル峰(4031m)を目的の山としましたが、旅行会社とのやりとりの中で「登山禁止」との情報を得ました。そのため、行き先を国や地域から再検討をした結果、「遊牧民の山」の意味を持つ、モンゴル国・西奥部のアルタイ山脈・マルチンピーク(4050m)としました。

各種手配等については、モンゴル国内の旅行社に3社、日本のモンゴル専門旅行社3社に問い合わせをして、その中の登山やアウトドアを扱う3社と数回やりとりをして、最終的にモンゴル国内の「シネズーチトラベル社」に手配を依頼しました。モンゴル国内の移動や宿泊、ラクダや4輪駆動車、料理人やキッチンテント等のベースキャンプの設営、各種装備の相談からガイドの手配まで、何度も連絡を取り合いました。

モンゴル国内の旅行社の特徴としては、とにかく返事が来るのに時間がかかる…。だいたい1週間はかかりました。「商売する気があるのかな??？」と感じていましたが、依頼した「シネズーチトラベル社」は、たいへん面倒見が良く、社長は気さくで、社員やガイドは献身的でとても充実した登山となりました。

③ 先発 ~ みんなと合流するまで

今回は、海外経験豊富なメンバーが多く、0田(k)さんとは中国・党河南山からカザフスタン・

ムラモルナヤステナ峰、韓国・雪岳山、モロッコ・ツブカル山、ネパールと今回で6回目の同行。I藤さんとは中国、モロッコと今回で3回目。N根君とは8回目！O城さんとは何となんとナント9回目の海外山行です！！。カザフ以来のM田(k)さんとは2回目、M田(m)さんとは韓国以来3回目。久々復帰のO田(m)くんとも2回目の同行です。そしてM田(t)くん、Y井(n)さん、新人のK島君とは初めてです。と言うわけで、私一人だけウルギーに先発移動して、この10名のメンバーを待つ間のことを少々。

アルタイ山脈の玄関口のバヤンウルギー県は、ロシアと国境を接しています。その県都ウルギーまでは、首都ウランバートルから中型機で空路およそ3時間。座席確保が全員分一度に出来なかったため2便に分かれ、私と通訳兼ガイドのオギくんの2名が先発です。午前5時過ぎにウランバートルを飛び立ち、8時にはウルギーに到着です。その後、午後5時20分着の便で到着するみんなを待つはずでした。そのはずでした…そうです、海外登山にはアクシデントがつきものなんです。

当初、後発便の時間変更が告げられたときの話。ウルギーはカザフ族の土地で、今は日本のお盆に当たるようで、羊や牛といった家畜をナント5000頭も先祖の霊に捧げるということでした。捧げるということは、5000頭もの命を奪うということです。それもウルギー空港からそれ程離れていない場所で、ということでした。5000頭もの家畜の死肉があれば、当然のことながら動物がそれを目当てに集まります。もちろん鷲や鷹、そのほかの多くの鳥たちも！そこで懸念されるのが、「バードストライク」の危険だということでした。このもっともらしい理由で、日中は飛行機の離着陸が出来ないという航空会社からの説明でした。

ウルギーに着いた私は、ホテルで仮眠を取った後、隣のブルーウルフ・トラベル社で今後の登山の打ち合わせをしました。カザフ語が通じないこと以外は、借り上げ車両や荷物運搬用のラクダ、食料や水、コック等々についての話は順調で特に問題は無く、何よりも後発便の動向が気がかりでした。その中で、「後発便のフライトがいったん白紙になった」との情報が通訳のオギさんのスマホに送られてきたんです。「ホントに飛ばんかったら、どげえしょうか??？」と半ば途方に暮れていましたが、およそ1時間後に「深夜便になった！」と連絡が。それも200km南東の町ホブドに着く便です。

午後10時30分。ホブド空港へ向けて、10名のメンバーをお出迎えのため4WDの名車ランドクルーザー4台でウルギーを出発。10分も走れば、すぐにガタガタ道というか、草原に刻まれた轍です。真っ暗な草原をただひたすら「ぶっ飛ばす！正にぶっ飛ばす！！」そんな感じでした。眠いのになんか眠れず、ずっと身体全体がゆずられていました…。途中、「こげな所に店があるんか？こげな時間に開いちょるんか？」という店でお茶をいただき、休憩を取りながら、午前3時過ぎにホブド空港に到着。その後、5時40分無事にみんなと合流できました！このときばかりは、「これで今回の山は、成功したち言うてん良いんじゃねえか！」と心底思ったんです。

さて、前述の「バードストライク」。世界各地で重大事故の要因として知られ、とても怖い事故です。本当ならば…。そうです、ナントナントこれは航空会社のウソ！大うそ！だったんです。これは帰国間際にシネズーチトラベルの社長・ガンゾリグさんから知らされたんですが、航空会社

が機体を準備できず、そのためについた大うそだったんです。日本では、あり得ないと思われることも海外では…。我々も驚きましたが、実は最も青ざめていたのは最前線で航空会社と渡り合ってくれた現地スタッフのアルタイさんではなかったかと感じています。以下、アルタイさんからのメール(A 嶺への返信、一部略、表現は原文のまま)です。

A 嶺様

お世話になっております。

こちらこそありがとうございました。

私たちはちゃんと Malchin Peak まで登山できることお祈りしていました。

皆様がとても頑張ったおかげでみんな無事に登山できました。

当時のオーギーさんが登山できた動画と写真送ってくれた時嬉しくて涙が出るほどでした。

私達は一緒に登っていませんでしたが心は一緒でした。

自分が登ったような気分で運勢がよくなりました。

～中略～

O 田(m)さんは本当にゲル買うんですか？ゲルの情報メールさせていただきます。O 田山からメールが来たら。

国内線本当に迷惑おかけいたしました。申し訳ございません。

国内線で私達とても疲れました。

もしその日のフライトがなくなったらどうしようと思って泣くほどでした。

でもみなさんが本当にアルタイ山脈に登りたい気持ちがあったからモンゴルの山の神様が道を開いてくれたでしょう。

～中略～

また是非モンゴルにいらしてください。

来年は Otgontenger 山を目指しましょう。

シネズーチトラベル・アルタイ

*O 田(m)さんのゲルの話は、O 田(m)くんに聞いてみてください！

④ 登頂

登山初日 10:30 登山開始。ロシアと国境を接する国立公園入口を出発。気持ちの良い草原を緩やかに登り、自生するエーデルワイスや時折顔を出すジリスに和まされながら、少しずつ高度を上げます。小川や湿原をよけて進んでいると、14:50 我々の荷物を運ぶラクダの隊列が追い越して行きました。そしてひと山越えると、雄大なポターニン氷河とマルチンピーク(4050m)が見えてきます。みんな「おー、あれか！」と口々に、明日登る山をカメラ片手に写真に収めています。その後少しずつ下って、風が冷たくなってきた頃 16:50 ベースキャンプ(2900m)に無事到着しました。

夕食は、途中ラクダに乗って我々を追い越していったコックのおばちゃんを作ってくれた、モンゴルの家庭料理です。彼女は、弁当も含めた朝昼晩の3食をそれぞれ違ったメニューで作ってくれて、飽きさせず、好き嫌いの多い私でもとても美味しくいただくことが出来ました。美味

かった！ありがとう！！

2日目、06:00起床。朝食と準備を済ませ、冷たい空気の中07:10出発。モンゴル国内最大のポターニン氷河とそのサイドモレーンを見ながら草原を歩き、氷河の奥には、モンゴル最高峰・フイテン峰(4374m)がどっしりと存在感を示しています。山頂部は雲に覆われているものの、長大な氷河のその奥のぶ厚い雪と氷に覆われたこの山は、登頂に2週間かかると聞いていますが、いつか登りたいと登頂意欲をそそられる大きな魅力的な山でした。

さて、出発して草原をおよそ1時間半。いよいよマルチンピークの山頂まで標高差およそ1000m。ひと登り？ふた登りでしょうか？その基部に到着してひと休みです。その後、歩きにくいゴロゴロとした大きなラグビーボール大のガレ場を登るんですが、ガイドの登るルートが時折「えっ、こっちかえ？」と思うことも。そんな時、藤さんが「違う！アブねえわい、こっちじゃ！」とルートを正します。みんなでゆっくりと高度を上げながら、12:40山頂部の氷河が迫る山頂直下の肩に到着。ここで一本立てて、みんな思い思いに写真を撮ったり、モンゴルの民族衣装に着替えた。私は、この秋に結婚する教え子のお祝いメッセージを大城さんに撮影してもらい、拍手喝采！（鉄ちゃん、ありがとう！！教え子も、と～っても喜んでくれました！！）。そして13:23登頂。肌寒い風の中、我々11名全員と通訳・ガイド3名をあわせて14名がマルチンピーク山頂に立ちました。

それぞれの思いを胸に山頂に立ち、握手とハグと涙と…。ただただ感謝。初めての4000m、初めてのメンバー、言葉に表せない思いを胸に刻んだメンバーも、11名、いえ14名がひとつになって登った山頂となりました。全員で記念写真を撮って、13:37山頂を後にしました。後には、登山者の無事を祈る小さな旗がたくさん巻かれた山頂標が立っているだけでした。

下山途中。登るときよりも、氷河から流れ出るクリークが水量を増しています。あちこちよけながら往路を戻ります。時折振り返りますが、山にはガスがかかり始めています。そしてBCのテントサイトが見え始め、草原を歩いて17:55無事にBCに帰着しました。「ただいまっ！」とキッチンテントをのぞくと、登頂のお祝いと打ち上げの準備がもうすでに！！食事モンゴルビールも心にしみる夜でした。

3日目、07:00出発です。初日のコースを戻るんですが、なんだか名残惜しくて、振り向き振り向き帰ります。マルチンピーク山頂付近には雲がかかり、「昨日がベストじゃった」「昨日しかなかったなあ」等々談笑しながら、国立公園入口へ。途中、新人のK島くんが変な格好で口を大きく開けています。「何をしよるんか？」と試してみていると、ちょっと離れた草原を移動している羊の群れを口から入れて、尻から出す写真と動画を撮っている模様。どうやら2、3人の先輩も絡んでいるようですが、何ともアホらしく、平和な光景でした。こんなことを繰り返しながら12:55無事に公園入口に帰り着きました。

この後は、来たときと同じランドクルーザーで、草原の道なき道のロングドライブです。6時間半の道のりをウルギーへ。これについては、誰か書いてくれているでしょう！？

⑤ 遊牧民の時間

通訳兼ガイドのオギさんが言うには、「彼らは時間の感覚が全く無いんですよ！」陽が昇って起き、馬や羊、ラクダ等の家畜の世話をし、草を食わせ、家畜の生活リズムに合わせているんです。だから、何回言っても時間を守らないし、こっちが怒っても、全く意に介さないんです。悪気がないんで、よっぽど悪いですよ…。半ばぼやきですが、優雅で少し羨ましい気もしてしまいます。しかし、旅行者相手では、これでは困ってしまいます。

登山開始の日、06:00 起床。準備と朝食を済ませ、荷運びのラクダを待ちます。08:00 の予定が、なかなか来ません。10:00 やっと来たかと思ったら、それから悠々と草を食むラクダとそれを悠然と眺める飼い主の遊牧民。「なんとまあ、遊牧民の時間च्छゅうのは、ホント自由च्छゅうか？ 自然च्छゅうか…」と思わず感じ入ってしまいます。結局、ラクダの荷造りはコックと飼い主に任せて 10:30 登山開始。ラクダが出発したのは12:30 だったとか…。

⑥ 50 周年記念登山に思う

私が豊嶺会に入会したのは 1991 年の夏すぎ、28 歳(の好青年?)でした。H さんの結婚披露宴がご縁で豊嶺会の門をたたき、28 年が過ぎました。そうです！人生の半分を豊嶺会で過ごしているんです。このころ、O 田(k)さんは 48 歳で I 藤さんは 38 歳。当時のお二人の年齢をすでに 8 年、18 年と超えてしまっている現実に、驚きとともに時間の流れの速さを感じ、「俺は、ちったあ成長しちよるんか??」なんて思ってしまう。

今回、50 周年という時の重みを感じながらの登山となりましたが、それは準備段階からずっと実感していました。

50 周年にふさわしい山とは？と考えながら山域の選定やメンバーの募集をしました。休暇等の条件で9日間という日数、それに見合う旅行費用、参加者全員が登頂を目指す山、4000m を超える山等々、様々な条件を満たす山を探し、考えました。それ故、今回の登山に対する思いはこれまでの海外登山とは少し違っていました。

私は感激屋で、以前は山頂で良く泣いていました。この辺の話は皆さんよくご存じかと思いますが、今回は涙腺のスイッチの入りどころがこれまでとは幾分違っていましたので、恥ずかしながら報告します。

いよいよマルチンピーク山頂へ向けて、その基部から少し登った頃、O 田(k)さんから声を掛けられます。

O 田(k)「A 嶺よい、わしゃここまでじゃわい。」

A 嶺「えっ、O 田さん、そげなこと言わんで一緒に行こうえ！」

O 田(k)「いや、ここで良いわい。」

A 嶺「O 田さん！」

O 田(k)「いや、わしゃここで満足じゃわい。」

A 嶺「O 田さん…」

とそこへ I 藤さんが、

I 藤「何を言iyorんかえあんだ、そらワライで、早よ行くで！O 田さんが行かんでどげえすんの

かえ！」

0 田(k)「そうかえ、ほんなら行こうかのお。」

さすがI藤さん！2人の信頼関係と、I藤さんにしか言えない言葉に、最後尾を登りながら少し涙がこぼれました。

山頂がいよいよ現実的に迫ってきますが、左側が人の頭位の大きさの岩がゴロゴロと切れ落ちた尾根が続きます。そこでY井(n)さんから声を掛けられます。

Y井(n)「A嶺さん、わたしもう無理…」

A嶺「大丈夫っちゃ！世話ねえっちゃ！」

Y井(n)「ホント…無理…」

とそこへI藤さん。

I藤「大丈夫じゃ！おーい、ロープ出せ！！」

またまたI藤さん！！かくして、Y井(n)はI藤さんとロープでつながれて元気に山頂へ向けて登り始めたんです。

下山中、コックのおばちゃんが作ってくれた弁当と行動食を食べながらの昼食時。みんなそれぞれに腰を下ろしてゆっくりしています。すると、先ほどすれ違ったカップルが、なぜか雪渓の方に登っています。ザザッと「なんか音がしたか？」と振り返ると一人が雪渓でスリップしています。それを見たI藤さんが、

I藤「アブねえ、あら滑落するぞ…。M田、行くぞ！！」

とあっという間に2人のもとへ。I藤さんとM田(k)さんが駆けつけたときには女性の方は滑落寸前でギリギリセーフでした。

やっぱりI藤さん！！そこには、私の入会当時・冬の南アルプスで鍛えてくれたときと同じ、そして中国・党河南山でザイルをつないでくれた時と変わらないI藤さんがいました。なんだか感激して、その後最後尾でこっそり目頭を押さえながらの下山となりました。

実は今回の山行で、0田(k)さんの後ろを登ることが何度かあったんですが、0田(k)さんのザックに縫い付けられた「豊嶺会」のワッペンがずっと目に入ります。そして「あ～、0田(k)さんはず～っと、50年も豊嶺会を、そして俺達を背負い続けてきてくれたんじゃないかあ…」と何度も胸が熱くなりました。この場を借りて、お礼を言わせてください。ありがとうございます。そして、50周年記念海外登山に関われたことを光栄に思っています。ありがとうございました。

終わりに。会として初めての国、初めての山域で4000mを越える山・マルチンピークを11名全員で登頂出来たこと、現地スタッフと気持ちの良い交流が出来、無事に帰国出来たことを心から嬉しく思っています。参加メンバーはもちろん、応援してくれた会員の皆さん、現地スタッフ全ての皆さんに感謝しています。ありがとうございました。豊嶺会は、今日も次の10年へ向けて登り続けます。

⑦ おまけ

通訳兼ガイドとして我々を7日間支えてくれたオギさん。彼は、埼玉県で4年間在住経験のあ

る34歳の(見た目よりずっと若く感じる)好青年です。本人曰く、彼はウランバートル市内から少し離れた草原で育った、遊牧民の出身だそうです。そして、彼の小学校、中学校の同級生が日本では知らぬものがない超有名人だそうです、果たして誰か？

なんとその人は、あの「横綱・白鵬」なんです！！白鵬がモンゴルに戻ったときは必ず会って、付き人や弟子の面倒を見るんだということです。ちなみにモンゴル国内での横綱の人気ナンバーワンは、日馬富士だそうです。